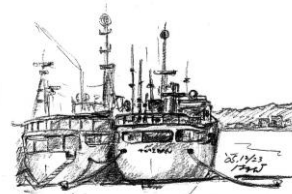


ビキニ被災支援 室戸の会

ニュース 2024年3月31日 No.57

発行 ビキニ被災を支援する室戸の会 太平洋核被災支援センター
連絡先 事務局 宿毛市 088-066-1763(山下) 室戸の会 0887-35-8725(濱田)



2024年2月28日～3月2日

「マーシャル訪問、ロンゲラップ島民と交流」

昨年の「ビキニデーin 高知」(2023年5月5日・6日)には、竹峰誠一郎さんの招きで日本に来ているマーシャル諸島共和国のエベレン・レボウさんが参加してくれました。幡多地区でのフィールドワーク、また本集会でも核実験の行われたマーシャルの実情が報告されました。また、元第13 光栄丸の船員の谷脇壽和、第5 海福丸の元船員の小笠原勝さんとも交流されたのです。マグロ船の被ばくとマーシャルの被ばくは同じ核実験によるものなのだという事をあらためて実感したのです。

高知原水協や太平洋核被災支援センターでも今度はこちらからマーシャルの式典に参加したいねという声が上がっていました。たまたま、今年は「ビキニ事件 70 年」ということもあり日本原水協がマーシャル訪問を行うということで、高知原水協が中心になって、高知県からもマーシャルに行こうという企画が現実のものになったのです。

折り鶴を折ってマーシャルの人たちに届けましょう

高知からは、「ビキニ被災船員訴訟」の原告団長の下本さんと太平洋核被災支援センターから笹島さんと濱田の三人が参加しました。単に三人が参加するのでは無く、室戸の元船員さんや遺族の方たちも一緒に参加できないかと考え、平和の願いをこめて折り鶴を折り、それをマーシャルの人たちに届けようと提案しました。

室戸では元船員さんたちが集まる「お茶会」がありますが、そこでみんなで折り鶴に取り組みました。「どうやって折るのか忘れたなあ」など言いながら、若い方にも手伝ってもらい、ちょっと曲がったのもありましたがたくさんの折り鶴が出来ました。糸に通して「レイ」にしたものと、一つ一つをストラップにしたものを作りました。ブラボー実験のさく裂したあの時の真っ赤な巨大な火球から放たれた放射線の下にいた船員から、同じく、その放射線の下にいたマーシャルの島民に送られる折り鶴です。



折り鶴を折る元マグロ船員、遺族・家族のみなさん

2/17 お茶会

「僕たちも折りたい」と小学生も折り鶴を

その話を聞いた高知市の小学校の先生が、子どもたちに話をしたそうです。その先生は、ビキニ水爆実験のことも勉強し、子どもたちと一緒に勉強をしていたそうです。小学生が、「僕たちも折りたい」と言い出したのだけど、時間も無いしたくさんは折れないだろうと思っていたら、子どもたちはドンドン折りだして、あれよあれよという間に777羽になったということでした。まさに、それこそ「千羽鶴」をつくってくれました。

「マーシャルのみなさんの幸せと人類の平和を願って」と書かれた「千羽鶴」、マーシャルの大統領に届けてくださいと頼まれたのですが、さて、どうしたものか。渡せるかどうかわからないけれど、とにかく持って行ってみようと思わずかりました。



ロンゲラップの方たちと交流

マーシャルでは現地の方々や日本原水協のみなさんのはからいでロンゲラップ環礁から移住を余儀なくされている島民であるキャッシーさんとミナさんと交流することができました。彼女たちの話は、アメリカ人に、毎日海に入って体を洗うように言われ、彼らの前で従うしかなかったこと、また家族や親せきにはガンなどの発症、異常出産が多くあったということなど想像を絶するものでした。なかなか口にもしにくいことだけど、私たちの先輩が頑張って語り、みんなで頑張ってきたことで私たちも頑張ってこれた、と話してくれました。そして、「アメリカは私たちを劣った人間とみているようだ」と語ったのでした。

私たちからは、日本の延べ 1000 隻にも上るマグロ船が被爆していること、癌の発症などで早くしてなくなった船員さんが多いこと、そして、室戸では「いわれん」ことになっていたことなどを下本さんが紹介してくれました。しかし、高校生の発見に励まされ少しずつ語られ、今は裁判も行っていることなどを話しました。そして、これはその船員さんや遺族の方たちとつくった折り鶴のレイだと紹介をして、二人の方に贈りました。お二人はとても喜んで下さり、なんと翌日の追悼式典にも首に飾って参加して下さったのです。

ロンゲラップの方たちの集まる行政事務所(島の出張所のようなもの)は翌日の夜、歓迎会を開いてくれました。ごちそうをいただき、歌や踊りで盛り上がりました。島の人はホントに踊りも上手で楽しそうに踊ります。私も、「we shall overcome」という歌を歌いました。そしたらなんとロンゲラップの方たちはこの歌をマーシャル語で歌ってくれたのです。歌のエール交換でした。



前列左から下本さん、ロンゲラップのミナさん、同じくキャッシーさん。右端は元国会議員のアバッカさん。後列は日本原水協の訪問団首にかけられた折り鶴の「レイ」。

核被害者追悼式典は国民の休日

3月1日は9時に博物館の庭に、子どもから大人まで300人くらいだと思いますが集まり、核被害者追悼式典の会場まで30分ほどパレードがおこなわれました。追悼式典ではアメリカの大使代理は、「過去の行動が私たちが謙虚さと決意をもって過ちに立ち向かい、私たちの行動が正義、思いやり、そ

してすべての人の人間の尊厳を守るという私たちのコミットメントの証となるようにしなければなりません」と述べ、核実験を正当化し、今後とも継続的にパートナーシップをとっていきたいと述べました。

それに対して、ハイネ大統領は「核犠牲者追悼記念日は、約 80 年前に行われた米国政府の核兵器実験計画がマーシャル諸島とその国民に与えた圧倒的な影響と人権侵害を厳粛に思い起こさせる日です。私たちが毎年この日を持つのは、核の遺産が私たちを特徴づけているからではありません。むしろ、冷戦中の米国政府の活動から放射状に広がる進行中の課題を乗り越えるために、私たちは団結していることを明確にするためです」と語り大きな拍手を受けました。



パレードの様子

政府主催の昼食会

式典後の昼食会には私たちも招待を受け参加しました。多分、記念行事に関わった方たちが勢ぞろいという感じだったのだと思います。スピーチの時間が設定され、日本からということで原水協の土田さんと、高知からは下本さんが日本のマグロ船の被ばくのことを報告しました。スピーチの後、小学生から預かった平和の折り鶴を無事、大統領に届けることができました。



ハイネ大統領 濱田 下本

「メジロ島」は「マジエロ環礁」の事？

中屋さんから、「あの頃はメジロ島という名前をよく言っていたことを覚えている」ということを聞いていました。「メジロ島」というのはどこだろうかと思ってマーシャルの島を見ていると、クワジュリン環礁にある「メジヤト島」、「メジツト島」、「マジエロ環礁」など似た名前があることに驚きました。そして、きっとこれらの島のどれかに違いないと思ったのです。中屋さんは 1954 年に乗っていたのは勝祐丸(38t)という 40t 足らずの船でした。この船ではマーシャルまで行かず、大東島周辺かパラオのあたりだと思えます。しかし、その後 1956 年から 1960 年の間には大洋丸(203t)、第 2 幸成丸(192t)、第 2 盛幸丸(99t)に乗っています。中屋さんはサモア船団としてサモアの方にも行っていたと言います。そして、補給などのために「メジロ」に寄ったとも言われていました。ちなみに、サモアにはアメリカのバンキャンブというツナ缶詰工場があり、たくさんの船がそこに水揚げし



とても広いマジエロ環礁内の港。
夜中には南十字星を見ることが
できました

ていたというこの様です。「遠洋」1957 年 8 月 9 月合併号には「サモア船団最低保障 15000 円確立」という記事があり、サモア船団船主と団体交渉をしたことが書かれています。

1955 年以後、室戸のマグロ船はマーシャルを越え、サモア周辺まで行き操業していたのです。そして、「マジエロ」の大きな港に入り時々補給をしていたのではないかと思います。アメリカは 1956 年～1958 の間、エニウェトク環礁で 33 回、ビキニ環礁で 16 回、1957 年にはイギリスがクリスマス島で 4 回、1962 年になるとアメリカはクリスマス島で 24 回ジョンストン島でも 12 回の核実験をしています。

被ばく船員遺族 怒り新た

2024.3.31 高知

ビキニ追悼式参加の下本さん

70年前に米国が水爆実験を行った太平洋・マーシャル諸島で今月開かれた追悼式典に、被ばくした元漁船員の遺族、下本節子さん(73)が参加した。初めて現地を訪れた下本さんは、強制移住を余儀なくされた島の住民と交流し、「直接行って話を聞いて、怒りがこみ上げてきた」と核廃絶への思いを強くした。

1954年3月1日、マで水爆「ブラボ」の実験
マーシャル諸島のビキニ環礁が行われた。室戸のマグロ



昼食会で現地の被ばく女性と手を取り合う下本節子さん
右。女性は室戸の元船員が作った折り鶴を掛けていた
(マーシャル諸島マジュロ、浜田郁夫さん提供)

島民と交流 折り鶴贈る

漁船だった下本さんの父は近くの海域を操業中に被ばく。がんのため、2002年に78歳で亡くなった。マーシャル諸島の首都マジュロでは毎年3月1日に追悼式典が行われ、70年の節目となる今年は本県から下本さんと太平洋核被災支援センター共同代表の浜田



追悼式に向けて、折り鶴を折る元船員ら(室戸市室戸岬町)

郁夫さん(64)が参加。2日間にわたり、関連イベントを見たり、現地メディアの取材を受けたりした。

下本さんが印象深かったと振り返るのは、ビキニ環礁東側のロンゲラップ環礁で被ばくした女性2人との面会だった。2人とも下本さんと同世代で、幼少期に核実験で放射性降下物を浴びた。島民は1985年までに全員移住を余儀なくされ、今も島には戻れていない。被ばくの影響で島の女性流産が多かったという。

通訳を介してお互いの体験を語り合った後、下本さんは「日本の船は自分の国に帰れた。逃げることもできなかつた島の人は核実験をどう思うか?」と尋ねた。女性は「米国は自分たちを人間扱いしていない。島に帰れず人生を狂わされた」と答えた。静かな語り口に無念がこもっていた。

「島の人のことを考えたら、私も腹が立ってきて許せんと思った」と憤った下本さん。核の恐ろしさを実感し、「放射能の被害を絶対なくさないといけない」と改めて決意した。

浜田さんはその女性2人に折り鶴の首飾りを手渡した。室戸とマーシャルの人がつながったらしいとの願いを込め、室戸市の元船員や遺族らと一緒に折り鶴だった。

(2024年3月31日 高知新聞)

◆『ビキニの海の願い』(紙芝居を本にする会編 南の風社 2500円) 好評発売中

<問い合わせ> 南の風社 電話 088-834-1488 Eメール edit@minaminokaze.co.jp

◆室戸の会 4月「お茶会」4月13日(土)10時半から13時 場所 室戸市菜生市民館